

「失われた時を求めて」における
METEMPSYCOSE

清 家 浩

三島由起夫の「豊饒の海」四部作が英訳された際、『これは、プルーストだ。』という評が一部にあった。という話を聞いて、強く印象に残った。このセリフを吐いたのが誰か、こういう評価が、外国で、どの程度のひろがりを持つものか、全く不明なままに、この **affirmation** は、一つの問いかけとして、今なお、残されている。ところで、「豊饒の海」第一巻末尾の注は、この作品が、『浜松中納言物語』を典拠とした夢と転生の物語である、と語っている。これを先の **formule** にあてはめると、『転生の物語としての豊饒の海、これは、プルーストだ。』これを、さらに、逆転させて、『プルースト、それは夢と転生の物語としての豊饒の海だ。』と言いかえる時に、この論のテーマが生まれる。しかし、急いで言い添えねばならないが、この小論が扱おうとするのは、それも、又、一つの論を形成しうることになるのであろうが、三島の作品と「失われた時を求めて」の比較、検討ではないのである。ここで行おうとするのは、このようにして得られた、輪廻転生 (**métempsychose** あるいは、 **transmigration des âmes**) のテーマに照らして、「失われた時を求めて」を再び読みなおす、という作業である。

それでは、**métempsychose** とは何か。「人間や動物の霊魂が死滅することなく、行為の善悪に従って、天国、地獄などの世界に生まれかわり、業と報との因果関係を無限にくり返すこと。」（角川国語中辞典）仏々辞典の定義も同様である。 ≪ *Doctrine selon laquelle une même âme peut animer successivement plusieurs corps humains ou animaux, et même*

des végétaux. » (Paul Robert, Dictionnaire de la Langue Française)

さらに、古代ギリシヤにおいても、人間の本質的部分である魂が、完全に純化されるまで、肉体をとりかえひきかえ、一連の転生を経験する、という考えは存在した。⁽¹⁾

しかし、この論では、仏典にしる、ギリシヤの教説にしる、輪廻転生の教義的意味を離れて、むしろ、与えられた *métempsychose* という語—容器に、「失われた時を求めて」という一作品に即した、意味—内容を、盛りこんでみたい、と思うのである。

I. Avant Proust

「失われた時を求めて」の話者が、無意識的記憶をこそ、作品創造の基底に置くべきだと自覚する時、自己の先達として思い浮かべるのが、Chateaubriand, Nerval, Baudelaire の三人の作家である。⁽²⁾ここでは、プルーストの作品に取り組む前に、プルーストが、特に、愛着と *affinité* を感じ続けた、ネルヴァルとボードレールを取りあげて、「*métempsychose* による照射」の予備作業としてみたい。

ネルヴァル

プルーストは、*Contre Sainte-Beuve* の中で、*Sylvie* の独創性のありかを分析し、ネルヴァル再評価を試みている。⁽³⁾あるいは、*A propos du «style» de Flaubert* においては、*Les filles du feu* の、記憶現象 (*un phénomène de mémoire*) による、突然の場面転換の手法 (*ce procédé*

(1) ガスリー、『ギリシヤの哲学者達』、式部久、澄田宏訳、理想社、pp. 49～51

(2) *A la recherche du temps perdu*, Ed. Pléiade, Gallimard, 3 vol, Tome III, pp. 919～920. (以下、III. pp. 919～920のように略)

(3) *Contre Sainte-Beuve préfacé de Pastiches et mélanges et suivi de Essais et articles*, Ed. Pléiade, (以下C. S. B.と略) PP. 233～242

de brusque transition) に言及している⁽⁴⁾。それらは、ブルースト自身の美学に深くかかわりを持つ réflexion であって、神秘思想の宝庫といった趣きを持ったネルヴェルの métempsychose 観が、ブルーストによって、直接的に語られることはない。

さて、それでは、ネルヴェルが、直截に、métempsychose を語るテキストを取りあげてみよう。

「火の娘達」の冒頭、彼は、アレクサンドル・デュマに、こう語りかける。

「あなたは、どのような確信をもって、我々の古くからの友人、ノディエが、いかにして、大革命の時期に、ギロチンにかけられる不幸を持ったか、を物語っていたか御存知です。この話を本気にした我々は、彼が、いかにして、首を再びくっつけてもらうに至ったか自問してみるほどでした……」

« Vous savez avec quelle conviction notre vieil ami Nodier racontait comment il avait eu le malheur d'être guillotiné à l'époque de la Révolution; on en devenait tellement persuadé que l'on se demandait comment il était parvenu à se faire recoller la tête . . . »⁽⁵⁾

ここでは、ブラックユーモアの風味がきつすぎるほどだが、続くパラグラフでは、

「案出すること、実のところ、それは、再び想い出すことだ。と、あるモラリストは言っています。その作品の主人公が現実に生きた証拠が得られないまま、私は、突然、ピタゴラスや、ピエール・ルルーと同じくらい、固く、輪廻転生を信じたのです。」

« Inventer, au fond, c'est se ressouvenir, a dit un moraliste; ne pouvant trouver les preuves de l'existence matérielle de mon héros, j'ai cru tout à coup à la transmigration des âmes non moins fermement

(4) C.S.B. P. 599.

(5) Gérard de Nerval, Oeuvre, Tome I, Ed. Pléiade, P. 150.

que Pythagore ou Pierre Leroux. ≧⁽⁶⁾

さらに、

「私は、あらゆる縫い目の上に刺繍されていた。前の世での私の全生存の連続をとらえたと思じた瞬間から、私には、私が、かつて、君主、王、魔術師、悪魔、あるいは、神でさえあったことも、同様に、なんともないことでした……」

≪Moi, je m'étais brodé sur toutes les coutures. Du moment que j'avais cru saisir la série de toutes mes existences antérieures, il ne m'en coûtait pas plus d'avoir été prince, roi, mage, génie et même Dieu... ≧⁽⁷⁾

又、この輪廻の観念は、例えば、あるなつかしい歌に結びつく時、次のような詩句を生みだす。

「その歌を耳にするたびに、
私の魂は、二百年も若がえる……」

「恐らく、前世で、すでに見た
そして、今、想い出している
一人の貴婦人。」

≪Or, chaque fois que je viens à l'entendre

De deux cents ans mon âme rajeunit... ≧

≪(···) une dame...

Que, dans une autre existence peut-être,
J'ai déjà une... et dont je me souviens! ≧⁽⁸⁾

以上のように、ネルヴェルにあっては、 autre existence, transmigration des âmes, existences antérieures 等の言葉によって、輪廻転生が、直接、

(6) G. de Nerval. 前掲書, PP. 150 ~ 151

(7) Ibid. P. 151.

(8) Fantaisie; Ibid. P. 18 又, Proust, C.S.B. P. 235, 236 に同じ詩からの引用がある。

喚起される。他のテキストから、まだ、多数の例をひろって、さらに細かく分析することが可能であろうが、ここでは、ネルヴァルにおける輪廻思想のひろがりは無視して、プルーストが深い関心を寄せたネルヴァルにおいては、*métempsychose* に対する直接的な言及が見られる、という結論を出すにとどめておこう。

ボードレール

プルーストが、ボードレールの詩句に触れた箇所は多い。「失われた時を求めて」の中だけでなく、*Contre Sainte-Beuve* においては、ボードレール擁護に一章をあてている⁽⁹⁾、「ボードレールについて」という一文もある⁽¹⁰⁾。さて、しかし、信仰者か無神論者かは別として、キリスト教的ヴィジョンの色濃いボードレールと輪廻転生は、次の詩句からも感じとれるように、全く、そぐわないのではなからうか。

「主よ、まさしく、これこそ我々に可能な、

我々の尊厳の最良のあかしなのです。

世代から世代へとめぐり

あなたの永遠の岸辺で消え果てる

この激しいすすり泣きこそ。」

«... c'est vraiment, Seigneur, le meilleur témoignage

Que nous puissions donner de notre dignité

Que cet ardent sanglot qui roule d'âge en âge

Et vient mourir au bord de votre éternité ! »⁽¹¹⁾

しかし、プルーストがしばしば取りあげる詩句を並べてみる時、それらの詩句の「悪の華」全体における位置、荷なわされた意味、役割、から独立して、一つのイメージ、*métempsychose* 的イメージが得られるのである。

プルーストが、好んで触れているのは、「髪、*La chevelure*」(引かれ

(9) *Sainte-Beuve et Baudelaire* in C.S.B. pp. 243 ~ 262

(10) *A propos de Baudelaire*, Ibid. pp. 618 ~ 639

(11) *Les phares*, (v. 41 ~ 44)

ている句は、『円く広がる広大な蒼天』 «l'azur du ciel immense et rond»⁽¹²⁾, (v. 27) 『永遠の熱がふるえる澄んだ大空』 «Le ciel pur ou frémit l'éternelle chaleur»⁽¹³⁾, v. 20 等々), 「異国の香り, Parfum exotique」(『帆やマストに埋められた港』«un port rempli de voiles et de mâts»⁽¹⁴⁾, v. 20, 等)であり, ここにくりひろげられる風景は, 例えば, 「秋の歌, Chant d'automne」の『赤く凍りついた魂』«un bloc rouge et glacé» v. 8, 『極北の地獄における太陽』«le soleil dans son enfer polaire» v. 7, が喚起する, 『冷たい闇』«les froides ténébres» v. 1, 即ち, 死の世界と全く対蹠的である。詩人は, 夜, 暗い闇房 (l'alcôve obscur) にいて, 女の胸や髪を匂いに誘われて, 熱帯の風景を思い浮かべる。ところで, この風景こそは, ボードレールが「前の世, La vie antérieure」と題する詩で描く風景にはかならない, のではあるまいか。⁽¹⁵⁾『海の太陽』«les soleils marins» v. 2, 『大空の姿をゆする波』«les houles, en roulant les images de cieux» v. 5, 『青空, 波, 壮麗, そして, 裸の奴隷の真中で』«Au milieu de l'azur, des vagues, des splendeurs/Et des esclaves nus ...» v. 10 ~ 11. 等々。即ち, 女の匂いによってよみがえるのは, 「前の生, La vie antérieure」なのである。レミニッサンスの詩, と, プルーストが言う, 先の二つの詩を, この詩に結びつけて, ここに, 現在の生と前世での生, という ⁽¹⁶⁾ métémpyose 的図式を得ることができるのである。ここから彼方, あるいは, 今から過去へと動く想像力, あるいは, 記憶の機能をさえも, ここで, 我々は, métém-

(12) III, P. 920

(13) C.S.B. P. 235 P. 638

(14) 注 (12) と同じ箇所。(但し, voiles を, Proust は, flammes 『炎』としている。) 及び C. S. B. p. 255。これら二つの詩は, 「『紀要 Annales』のアンケートに対する返答」(C. S. B. p. 641) にも, 引かれている。

(15) プルーストによるこの詩からの引用。C. S. B. p. 255, p. 629。この詩については, Baudelaire, Les fleurs du mal, Garnier, p. 288 の注を参照。

(16) III. p. 920 及び C. S. B. P. 640

psychose 的に捉えうるであろう。

ネルヴェルとボードレールを、*métempsychose* の観点から眺めることによって、我々は、二つの基準を得た。即ち、直接的に喚起される輪廻転生と、比喩的にとらえられるそれ。この二つの基準を援用しつつ、次に、「失われた時を求めて」を眺めることにする。

II. Métempsychose directement évoqué

冒頭、すでに、次のような記述が見られる。

「私には、書物が語っているもの、例えば、一つの教会、一つの四重奏、フランソワ一世とシャルル・カンとの対立、が、私自身のことであるように思われるのだった。……ついで、この信念は理解しがたいものになり始める。まるで、輪廻転生を経た後の、前世の思考のように。」

«... il me semblait que j'étais moi-même ce dont parlait l'ouvrage; une église, un quatuor, la rivalité de François I^{er} et de Charles-Quint. ... Puis, elle (= cette croyance) commençait à me devenir inintelligible, comme après la métempsychose les pensées d'une existence antérieure. »⁽¹⁷⁾

さらに、少し先で、

「私は、動物の生命の底におののいているでもあろうような、きわめて原始的な生存感のみを抱いていた。私は穴居人よりも貧しかった。……私は、一瞬のうちに、文明の幾世紀を越えていた。……」

«... j'avais seulement dans sa simplicité première le sentiment de l'existence comme il peut frémir au fond d'un animal; j'étais plus dénué que l'homme des cavernes ... je passais en une seconde par-dessus des siècles de civilisation ... »⁽¹⁸⁾

夜中に目ざめた「私」の意識の状態。思考の伴わない動物的な生存感(私

(17) I. P. 3

(18) I. P. 5

が動物に宿っていた時の記憶、ででもあろうか)。それは、現在生きている現実の明瞭な意識がまいもどってくれば、たちまち消え去るであろう。なぜなら、転生の後では、前の世の状態は忘れ去られているであろうから。

これらの文章からは、プルーストの *métempsycose* 思想への親しみがうかがわれる。ネルヴェルのように、「信じる」と言っているのではない。が、一種の共感が存在するように思われる。そして、この共感は、直ちに、同じ輪廻思想を含んだケルトの伝説に結びつく。

「私は次のようなケルト人の伝説を非常にもっともだと思う。即ち、我々が失った人達の魂は、何かより劣った存在、動物とか、植物とか、無生物とか、の中に囚われていて、我々が、たまたま、その木のそばを通ったり、彼らの牢獄である事物を所有したりする日まで、我々には、失われたままである。」

« Je trouve très raisonnable la croyance celtique que les âmes de ceux que nous avons perdus sont captives dans quelque être inférieur, dans une bête, un végétal, une chose inanimée, perdues pour nous jusqu'au jour ... où nous nous trouvons passer près de l'arbre, entrer en possession de l'objet qui est leur prison. »⁽¹⁹⁾

この信仰は、不滅である人間の靈魂が、人間としてだけでなく、他の動物の肉体の中へも連続して化身してゆくという、ピュタゴラス派の信念と通じる⁽²⁰⁾ところを持っている。が、ケルト人の信仰は、次の点で、ピュタゴラス流の輪廻とも、キリスト教的魂の不滅とも異なる。即ち、

「我々が、これらの魂を認めるやいなや、呪縛は解かれる。我々によって解放された魂は、死を征服し、よみがえり、我々と共に生きるのである。」

« ... sitôt que nous les avons reconnues, l'enchantement est brisé. Délivrées par nous, elles ont vaincu la mort et reviennent

(19) I. P. 44

(20) ガスリー、前掲書P. 49 彼らのタブー、肉食の禁止は、この信念と関連している。

vivre avec nous. ≧⁽²¹⁾

特徴的なのは、輪廻の連環に入っている者達を解放する能力が、現在を
生きている我々に与えられている点であり、プルーストが、このケルト人
の伝説のうちで、もっともだと是認するのは、まるでおとぎ話的な、この
後半部である、と思われる。プルーストは、ケルト人の伝説を語りながら、
理知あるいは意志的な想起によってはよみがえり得ない、死に果てた過去
の、しかし、奇跡的なよみがえり、を、頭においているのである。⁽²²⁾お茶に
ひたしたプチット・マドレーヌによって引きおこされるレミニッサンスの
経験は、ケルト伝説と固く結びついて、話者に、解釈されるであろう。

そして、この伝説は、後年のバルベックのユディメニールの『三本の木』
のエピソードにおいても、まだ、こだましているのである。

「私は、むしろ、それら（三本の木）が、過去の幻影であると信じた。
……亡霊のように、それらは、私に、共に連れていってくれ、生命を返し
てくれと頼んでいるように思われた。」

≪ Je crus plutôt que c'étaient des fantômes du passé
comme des ombres ils semblaient me demander de les emmener avec
moi, de les rendre à la vie. ≧⁽²³⁾

ケルト人の輪廻的伝説を再び我々に喚起するこのエピソードが、ジャン
ポミエによって、次のように、ネルヴァルに結びつけて注釈されるのも、
当然のことである。

「そして、プルーストは、『恐らく、もう一つ別の世で』、これらの木
々を見たのであったろう。ネルヴァルが、前世で、自分の夢の女城主に出
会ったと信じていたのと、ほとんど、同じように。」

≪ . . . et Proust avait vu ces arbres ≪ dans une autre existence

(21) I. P. 44

(22) 注 (21) の引用文に続く、 Il en est ainsi de notre passé. 以下の文章を参
照。

(23) I. p. 719. なお、拙論「“Les trois arbres d'Hudimesnil” の位置づけ」、
広島経済大学研究論集、第一巻第一号、1978、pp. 70～71 参照。

peut-être », à peu près comme G. de Nerval croyait y avoir rencontré la châtelaine de son rêve. ⁽²⁴⁾

このようにして、まだ、その創造的意味が十分に解明される前、無意識の想起は、*métempsychose* の観念と深く結びついていた。ことに留意しておこう。

さて、ここで、アンドレ・モーロワが、「彼（ブルースト）が魂の不滅の観念にいささかなりとも信を置いた稀なテキストの一つ」*« L'un des rares textes où il ait accordé quelque crédit à l'idée de l'immortalité de l'âme, »*⁽²⁵⁾と云う、すでに、あまりによく知られすぎた『ベルゴットの死』のくだりを、眺めてみることにしよう。

医者から安静を命ぜられていたベルゴットは、にもかかわらず、フェルメールの絵『デルフト風景』の、黄色の小さな壁面 (*un petit pan de mur jaune*) を見るために、展覧会に来て発作に襲われる。

「彼は死んでいた。永久に死んだのだろうか。誰がそう言えるだろう。確かに、降霊術の実験も、宗教の教義と同様、魂の存続の証拠をもたらしてはいない。我々に言えること、それは、この世においては、まるで、我々が、前世で負わされた義務の重荷を背負って、この世に生まれてきたかのように、すべてが進行する、ということだ。……無神論の芸術家にとって、一つの作品を20度も書き直す義務が自分にあると考える理由はひとつもない。作品が引きおこすだろう賞讃も、うじに食われる自分の肉体には、どうでもよいことである以上は。」

« Il était mort. Mort à jamais ? Qui peut le dire ? Certes, les expériences spirites pas plus que les dogmes religieux n'apportent de preuve que l'âme subsiste. Ce qu'on peut dire, c'est que tout se passe dans notre vie comme si nous y entrions avec le faix d'obli-

(24) Jean Pommier, *La mystique de Marcel Proust*, Droz, 1968, P. 24, ネルヴェールの夢の女城主云々は、先に引用した、*Fantaisie*, 注(8)を参照。

(25) André Maurois, *A la recherche de Marcel Proust*, Hachette, 1949, P. 12.

gations contractées dans une vie antérieure; il n'y a aucune raison pour l'artiste athée à ce qu'il se croie obligé de recommencer vingt fois un morceau dont l'admiration qu'il excitera importera peu à son corps mangé par les vers . . . »⁽²⁶⁾

「前世で負わされた義務の重荷」 ≪le faix d'obligations contractées dans une vie antérieure≫ は、いかにも、仏教的な業を思わせるけれども、ここで言われる前世は、既存の輪廻説から借りられたものとは思われない。ケルト人の伝説を語る時のどこか心楽しい趣きと、この一節の苦渋の印象とを識別するべきであろう。一枚の絵を見るために命を犠牲にするベルゴット（目まいを感じつつ、発作の近づくのを感じつつ、彼は、自分も、こんな風に文章を書くべきだった、と、まだ、言い続けている⁽²⁷⁾）と、普通人の生活をすてて、病気のために制限された自分の生涯の残りを作品完成に注ぎこむプルーストが重ねあわさり、『なぜ、書かねばならないか。作品とは、生命よりも貴重な何物かであるのか。』という、不可解な問いが提出される。それは、恐らく、前の世で、私が、そうすると約束していたことなのだ。私は、したがって、この世での報いは期待しない。そして、この前の世とは、この世を去って、私が再び帰ってゆく世界なのだ。そうでなければ、なぜ、この苦しい約束を、この世において、守る必要があらうか、と。答えは、このようになるであろうか。

≪... un monde entièrement différent de celui-ci, et dont nous sortons pour naître à cette terre, avant peut-être d'y retourner revivre sous l'empire de ces lois inconnues auxquelles nous avons obéi parce que nous en portions l'enseignement en nous, sans savoir qui les y avait tracées . . . »⁽²⁸⁾

プルーストは、何かある一個の輪廻転生説、魂の不滅説を信じている、というよりも、むしろ、彼流の説をここで作り出しているのである。

(26) III. PP. 187 ~ 188

(27) III. P. 187

(28) III. P. 188

音楽家ヴァントゥイユの作品が表現するように思われるのも、この『芸術家にとっての前世』的なものである。彼のソナタの小楽節 (*la petite phrase*) に導かれて、すでに、「スワンは、音楽のモチーフを、現実の世界とは異なる世界、異なる秩序の、真のイデー、闇に覆われた、未知の、知性では理解できないイデー、と、みなしていた。」

« . . . Swann tenait les motifs musicaux pour de véritables idées, d'un autre monde, d'un autre ordre, idées voilées de ténèbres, inconnues, impénétrables à l'intelligence, . . . »⁽²⁹⁾

そして、ヴァントゥイユの七重奏曲 (*septuor*) を聞く話者マルセルの自問自答。

「ヴァントゥイユは、この歌を、どこで学び、どこで聞いたのか。芸術家というものは、こうしてみると、自分自身では忘れてしまった未知の祖国の民であるらしい。」

« Ce chant, . . . où Vinteuil l'avait-il appris, entendu ? Chaque artiste semble ainsi comme le citoyen d'une patrie inconnue, oubliée de lui-même . . . »⁽³⁰⁾

「この失われた祖国、音楽家達は、それを覚えていない。が、しかし、彼ら各人は、常に無意識のうちにもせよ、この祖国と、ある種の調和の中で、結ばれあっている。」

« Cette patrie perdue, les musiciens ne se la rappellent pas, mais chacun d'eux reste toujours inconsciemment accordé en un certain unisson avec elle. »⁽³¹⁾

ベルゴットの死のくだりで、「前世 *vie antérieure* 」と呼ばれたものが、ヴァントゥイユの音楽では、(一度、スワンに、別の世界のイデー *idées d'un autre monde* と取られた後で) 敷衍されて、各芸術家が持つ、未知の、忘れ去られた、あるいは、失われた祖国、(*patrie inconnue, oubliée*

(29) I. P. 349

(30) III, P. 257

(31) Ibid.

ou perdue) として説明されている。そして、前者に出てくる、「降霊術の実験 *expériences spirites*」に対応して、後者の方には、「霊媒によって呼び出される、肉体を離れた靈魂, *les esprits désincarnés, évoqués par un médium*⁽³²⁾」の比喩が見られる。この共通する比喩が、二つのパサージュ、ペルゴットの死とヴァントゥイユの音楽のそれ、の連続を示している。

この二つのパサージュを通して、我々は、次のように言いうる。芸術作品あるいは創造そのものに関する問いかけに対し、ここでは、輪廻のイメージによる解答が与えられている、と。

ここまでのところで、我々は、プルーストの *métempsychose* への直接的接近を見てきたつもりである。次に、我々は、*métempsychose* の *connotation* によって、再び、テキストをとらえなおしてみることにする。

III. Métempsychose figuré

輪廻転生は、生誕から死を一つの単位として、一個の魂が生をくり返すことである。としてみよう。ところで、この生誕から死、あるいは、死から誕生、要するに、一つの生・という単位の尺度を変えてみる時、比喩的にとらえられた輪廻転生 (*métempsychose figuré*) のいくつかが得られるであろう。この視点から、「失われた時を求めて」の諸テーマを、ここで、眺めてみよう。

Sommeil – réveil

日常的にくり返される生と死、死と再生、それは、そのまま、睡眠と覚醒のサイクルである。(即ち、「一生」の単位が「一日」の単位に置きかえられている。)睡眠と死のイメージは、ごく普通に結びつき得るものであるが、プルーストは、意図的に、この二つを結びつける。コンプレーの、幼少の話者にとっての就寝の場面。「そして、私は、臨終の聖餐を受ける

(32) III. P. 256

ことなく、行かねばならなかった。」**«Et il me fallut partir sans viatique.»**
 「一たび部屋に入ると、あらゆる出口をふさぎ、錠戸を閉め、私自身の墓を掘り、私の寝間着の経帷子を身にまとわねばならなかった。しかし、鉄の寝台の中に埋葬される前に……」

«une fois dans ma chambre, il fallut boucher toutes les issues, fermer les volets, creuser mon propre tombeau, . . . revêtir le suaire de ma chemise de nuit. Mais avant de m'ensevelir dans le lit de fer . . .»⁽³³⁾

寝ることが死への出発であるかのように語られている。

それでは、目ざめはどうであろうか。

「人はもはや何物でもない。それでは、自己の思考や個性を、なくした物を捜すように捜しつつ、どのようにして、結局、他の異なるものではなく、むしろ、自分自身の『自我』を見出してしまうのか。なぜ、再び思考を開始する時、我々の中に宿るのは、前のものと異なる人格でないのであろうか。」

«On n'est plus personne. Comment, alors, cherchant sa pensée, sa personnalité comme on cherche un objet perdu, finit-on par retrouver son propre «moi» plutôt que tout autre? Pourquoi, quand on se remet à penser, n'est-ce pas alors une autre personnalité que l'antérieure qui s'incarne en nous?»⁽³⁴⁾

目ざめが、死からの復活として、ここでは語られている。そして、常に、昨日、寝る（死ぬ）前の私として、自分がよみがえるのはなぜか。死があったのに自分が変わっていないのはなぜか。この問いの背後では、昨日と変わっていない自己が、不変の魂に擬せられているのである。

かくして、我々は、同一の人格、自己を保ちつつ、死と再生を不断にくり返している。が、しかし、睡眠とは、全くの死であろうか。「眠りの最初の瞬間は死のイメージである。」**«Les premiers instants du sommeil sont l'image de la mort.»**⁽³⁵⁾ しかし、この世界で「自我は、別の形のもので、

(33) I. PP. 27 ~ 28

(34) II. P. 88

(35), (36) Nerval, Aurélia, 前掲書 p. 359

生の行為を継続する。」*«le moi, sous une autre forme, continue l'œuvre de l'existence.»*⁽³⁶⁾ 夢を第二の人生だと言うネルヴァルにとって、この二つの世界に断絶はない。そして、プルーストにとっての眠りの世界も同様に、理性の介入、干渉もなく、*métempsychose* が展開される世界である。即ち、そこには、「青年期への回帰 (*le retour à la jeunesse*)、過去の年月、失われた感情のくり返し (*la reprise des années passées, des sentiments perdus*)、霊肉分離 (*la désincarnation*)、魂の転生 (*la transmigration des âmes*)、死者たちの召喚 (*l'évocation des morts*)、狂気の幻想 (*les illusions de la folie*)、最も原始的な自然界への退行 (*la régression vers les règnes les plus élémentaires de la nature*)⁽³⁷⁾」が見られるのである。しかし、この世界、我々が、動物や花々に変身することも、時間と空間の中を無制限に動くことも可能なこの世界、それは、ネルヴァルの場合と異なって、目覚めの瞬間に忘れ去られる世界、日常の生活から隔絶された世界、したがって、我々にとって、存在しない世界となる。「もう一つの生活、即ち、人が眠っている時の生活は、その深い部分においては、時の範疇に従わない。」*«… l'autre vie, celle où on dort, n'est pas — dans sa partie profonde — soumise à la catégorie du temps.»*⁽³⁸⁾ このようにして、睡眠と覚醒の、時の中で連鎖するサイクルの中から、非時間的な夢の世界は排除されている。しかし、正確には、このサイクルには、夢の世界へ入るための覚醒時の自我の死、と、覚醒の世界へ帰り来るための夢の世界の自我の死の、二つの死が含まれているのである。

Moi successifs

眠りという死を経た後も、あやまることなくよみがえってくる前夜と同じ人格、自我。我々は、我々が、ずっと我々であり続けてきた、今も、あり続けている、と、感じている。しかし、はたして、そうであろうか。我々がかって味わった感情、今、味わっている感情、それは、同じものであ

(37) I. pp. 819～820

(38) II. P. 983

り続けた、あるいは、あり続けるであろうか。

「我々が、我々の恋や嫉妬と信じているものは、同一の、連続し、分割できない一個の情熱というのではない。それらは無限の継起する愛、異なる嫉妬からできていて、束の間のものである。が、途切れることのないために、連続しているという印象、単一であるという錯覚を与えるのである。」

«Ce que nous croyons notre amour, notre jalousie, n'est pas une même passion continue, indivisible. Ils se composent d'une infinité d'amours successifs, de jalousies différentes et qui sont éphémères, mais par leur multitude ininterrompue donnent l'impression de la continuité, l'illusion de l'unité.»⁽³⁹⁾

「自我」についても同じであろう。眠りという死によって中断されているばかりでなく、我々の自我は、瞬間毎に、新しく生まれる部分と死に絶えてゆく部分とからなる。「『失われた時を求めて』のテーマの一つは、あの、『我々は、日々、死にゆく。』である。」 «L'un des thèmes du Temps perdu est ce «Nous mourons tous les jours!»⁽⁴⁰⁾»

が、日々の習慣にしたがって生活する時、我々は、この自我の継起を意識しない。何か、日常的でないものの侵入が、初めて、それを、感じさせることになる。

例えば、アルベルチーナが、話者の家を出て行った時、

「各瞬間毎に、我々を構成している、まだ、アルベルチーナの出奔を知らず、そのことを通知してやらねばならない、無数の目立たない『自我』のどれかがあった。……かなり以前から再会することのなかった、あれらの『自我』のいくつかがあった。」

«... à chaque instant, il y avait quelqu'un des innombrables et humbles «moi» qui nous composent qui était ignorant encore du départ d'Albertine et à qui il fallait le notifier; ... Il y avait quelques-

(39) I. P. 372

(40) Claude Mauriac, Marcel Proust par lui-même, Seuil, 1953, P. 124

uns de ces « moi » que je n'avais pas revus depuis assez longtemps. »⁽⁴¹⁾

アルベルチーナの失踪という傷を受けた現在の自我。よみがえって、現在の自我をさらに残酷に苦しませる、かつて、アルベルチーナに結びついていた過去の無数の自我。しかし、これらの自我も又、まもなく、他の自我にとってかわられる。

「アルベルチーナなしで生きることによろやすとたえるであろう新しい存在が、私の中に、現われていた…… 前のは異なった名を持つべきであるこれらの新しい自我……」

« L'être nouveau qui supporterait aisément de vivre sans Albertine avait fait son apparition en moi, . . . Ces nouveaux moi qui devraient porter un autre nom que le précédent. . . »⁽⁴²⁾

この絶えざる自我の死。それは、言いかえれば、忘却のことである。我々が執着したものが、もはや、どうでも良いことになる。我々の愛した人や物は、忘れられる。

「他者に対する我々の愛が弱まるのは、彼らが死んだからではない。それは、我々自身が死ぬからである。」

« Ce n'est pas parce que les autres sont morts que notre affection pour eux s'affaiblit, c'est parce que nous mourons nous-mêmes. »⁽⁴³⁾

現在の自我にとって、前の自我とは何であろう。やがて来るだろう自我にとって、今の自我は何であるだろう。

不変であるように思われる「私」の中に、こうして、瞬間を一つの単位とした、あるいは、*période* を単位とした、*métempsychose* の連鎖が見てとれるのである。

Hérédité

睡眠と覚醒、あるいは、継起する自我を通して、輪廻しているのは、はたして、まちがいでなく、この私そのものであろうか。この私は、又、ある

(41) III. P. 430

(42), (43). III. P. 594

別の魂が輪廻の過程で取っている仮の姿ではなからうか。

「人はそれぞれ、自分の中に、肉親達の生命を継続させねばならないのか…」

« Chacun devant faire continuer en lui la vie des siens, . . . »⁽⁴⁴⁾

「説明しがたい無意識の流れが、私の中で、最も目立ため指の動きそのものまで屈折させて、私の両親と同じサイクルに引きこんでいた。」

« D'obscurs courants inconscients inflechissaient en moi jusqu'aux plus petits mouvements de mes doigts eux-mêmes à être entraînés dans les mêmes cycles que mes parents . . . »⁽⁴⁵⁾

遺伝 (hérité) が問題なのである。祖先から我々を通じ、又、子孫へと、連綿と続くサイクルの中でリレーされていく生命。もはや、私が輪廻するのではなく、何か私を越えるスケールのものが、私の中を輪廻していく。これが遺伝の示す *métempycose* である。そうして、「失われた時を求めて」において、作中人物は、ほとんどすべて、この遺伝的背景、もしくは、個人を越えた一つの一般性のもとに提示される、と、言う。例えば、スワン。

サン・トゥーヴェルト (Saint-Euverte) 夫人邸でのひとこま。

「苦悩があまりに激しかったので、彼は、手を額にやり、片眼鏡をはずし、その玉をふいた。」

« Sa souffrance devenant trop vive, il passa sa main sur son front, laissa tomber son monocle, en essuya le verre. »⁽⁴⁶⁾

匿名の手紙を受け取った時。

「彼の思考は混乱した。彼は、手を2～3度額にやり、ハンケチで鼻眼鏡の玉をふいた。」

« Son esprit se voila; il passa deux ou trois fois ses mains sur son front, essuya les verres de son lorgnon avec son mouchoir . . . »⁽⁴⁷⁾

(44) III. P. 107

(45) III. P. 108

(46) I. P. 347

スワン個人の癖とも見えるこのしぐさは、コンプレの最初、彼の父を通して、すでに、我々に示されていたものである。

「むつかしい問題が頭に浮かぶたびごとにくり返されていたしぐさ、即ち、額に手をやり、目と鼻眼鏡の玉をふくことによって、彼（スワンの父）は、満足した。」

«… il se contenta, par un geste qui lui était familier chaque fois qu'une question ardue se présentait à son esprit, de passer la main sur son front, d'essuyer ses yeux et les verres de son lorgnon.»⁽⁴⁸⁾

額に手をやり、眼鏡をふく動作は、スワン父子を通じて、思考の不可能のライトモチーフとなっているのである。スワンは、又、このスワン家内に伝わる癖、このサイクルよりさらに大きなサイクルにも、引きこまれている。

「ある種のイスラエル人達と同様、私の両親の旧友（スワン）は、彼の属する種族の人々が、次々に経過した状態、最も無邪気なスノビズム、最も不作法な下劣さから、最も繊細な礼儀にいたるまで、を、次々に、見せてくれたのかもしれない。」

«… Comme certains israélites, l'ancien ami de mes parents avait pu présenter tour à tour les états successifs par où avaient passé ceux de sa race, depuis le snobisme le plus naïf et la plus grossière goujaterie jusqu'à la plus fine politesse.»⁽⁴⁹⁾

「恐らく、彼にあっては、他のユダヤ人達との精神的連帯感と同時に、種属というものが、その特徴となっている肉体的な型を、よりはっきりと現わさせていた。スワンは、予言者の年齢に達していた。」

«Peut-être chez lui, la race faisait-elle apparaître plus accusé le type physique qui la caractérise, en même temps que le sentiment d'une solidarité morale avec les autres Juifs . . . Swann était arrivé à

(47) I. P. 358

(48) I. P. 15

(49) I. P. 432

l'âge du prophète.⁽⁵⁰⁾》

このように、スワンは、自己の属する「ユダヤの種」をもくり返している。同様に、ゲルマント (Guermantes) の人々は、その起源にある鳥類を思わせ続け、又、『家の精』(génie de la famille)⁽⁵¹⁾ を体現し続けるだろう。シャルリュス (Charlus) を筆頭とする同性愛者達は、聖書の時代からの呪われた運命をくり返すだろう。一個人の転生ばかりでなく、「種」の、あるいは、「グループ」の、さらに、「個性」の転生も考えられるのである。

IV. Anti-métempsycose

かくして、「失われた時を求めて」の中で、我々は、直接的言及から始まって、アナロジックに捉えられたそれまで、様々なレベルで、métempsycose に出会うのである。それは、まるで、この作品の構造そのものを指し示すかのようなものである。プルーストが、心情的に、魂の不滅の観念にひきつけられていたことは、疑いないように思われる。彼は、実際、友人 Georges de Lauris に、次のように書いている。

「もしも不滅の生命が私に保証されているとしたら、何という狂喜、何という陶醉でしょう。……私達が別れた人々、将来、別れることになるだろう人々すべてを、別の空のもと、いたずらに約束され、空しく待たれた谷間の中で、再び見出すことは、何と心楽しいことでしょう。そして、ついに、夢が実現されるとは、！」

«... et quelle folie, quelle ivresse si la vie immortelle m'était assurée! ... tous ceux qu'on a quittés, qu'on quittera, ne serait-il

(50) II. P. 690

(51) II. P. 440

(52) «une transmigration de personnalité», Raymond Jean, Nerval par lui-même, Seuil, 1964 P. 57, さらに, cf. C.S.B. P. 262, Hugo, Vigny, Leconte de Lisle, Baudelaire は、一個の、偉大な詩人というタイプの、異なる現われではないのか。という言及。

pas doux de les retrouver sous un autre ciel dans les vallées vainement promises et inutilement attendues ! Et se réaliser enfin ! ... ⁽⁵³⁾ ≧

ブルーストのこの願望は、何によって、保証されるであろうか。はたして、ブルーストの知性は、この永生、あるいは、転生の観念を是認したであろうか。

主要な二つの場面をふり返ってみよう。

「これらのすべては、実際、私にとっては、死んでいた。永久に死んだのか。」

≪*Tout cela était en réalité mort pour moi. Mort à jamais?*⁽⁵⁴⁾ ≧

死んでも同然、と、語られているのは、幼少期のコンプレの想い出である。周知のように、この問いかけの後、一杯のお茶の味によって、この過去は、完全によみがえる。(マドレーヌの場合。)

「彼は死んでいた。永久に死んだのか。」

≪*Il était mort. Mort à jamais?*⁽⁵⁵⁾ ≧

彼というのはベルゴットのことである。彼が永久に死んだのではない、ということは、何によっても証明されない。(ベルゴットの場合。)

マドレーヌの場合から出発して、知性は、次の結論に達するであろう。「恐らく、死後の魂の再生は、記憶現象として、考えられるだろう。」

≪*Peut-être la résurrection de l'âme après la mort est-elle conceivable comme un phénomène de mémoire.*⁽⁵⁶⁾ ≧

ところで、バルベックで、無意識的想起によってよみがえった祖母は、ケルトの伝説が伝えるように、死を征服してよみがえり、我々と共に再び生きる、という風にはならない。物理的にできないばかりでなく、記憶としても、再び、それは、うすらぎ、消え去ってゆく⁽⁵⁷⁾。つまり、死んだもの

(53) Claude Mauriac, 前掲書, p. 126 における引用。

さらに, III, p. 645 参照。≪*Mon désir de ressusciter après la mort* ≧

(54) I. P. 44

(55) III. P. 184

(56) II. P. 88

(57) II. p. 755 以下参照。

が、記憶の力によって、束の間、真によみがえることはあっても、そのことによって、死から解放されることにはならない、ことを、このエピソードは語っている。即ち、「記憶現象として考えられる再生」が、ここで、否定されることになるのである。

それでは、ベルゴットの場合はどうなるであろうか。彼が忠実であろうとした世界、死後、彼が再び帰っていきだろろう世界、「前世で負わされた義務の重荷」**«le faux d'obligations contractées dans une vie antérieure»**。を考えることなしには、彼の、肉体を犠牲にした創造行為は説明されなかった。しかし、ヴァントゥイユの場合も同様、彼らにとっての前世、来世は、一つの仮定にしかすぎない。ベルゴットは永久に死んだか、あるいは、我々は永久に死ぬのか、という問いには、今、生きている話者、そして、我々には、答えようがない。

それでは、スワンの例を見てみよう。彼は、自分の娘、ジルベルトに、自分の死後の存続の夢を託していた。

«… «un jour, quand je ne serai plus là, si on parle encore de ton pauvre papa, ce sera seulement avec toi et à cause de toi», Swann, en mettant ainsi pour après sa mort un craintif et anxieux espoir de survivance dans sa fille…»⁽⁵⁸⁾

ところが、この娘こそが、スワンの死と忘却の作業を完成させてしまうことになるのである。

«Même à propos des mots qu'il (= Swann) avait dits, des objets qu'il avait donnés, on prit l'habitude de ne plus le nommer, et celle (= Gilberte) qui avait dû rajeunir, sinon perpétuer sa mémoire, se trouva hâter et consommer l'œuvre de la mort et de l'oubli.»⁽⁵⁹⁾

我々の魂の死後の存続の夢も又、このように、空しいものであるだろう。

マドレーヌの場合、そして、ベルゴットの死の場合、共に、一見したところ、**métempsychose** を肯定するかに見えて、実のところ、作者によって、

(58) III. P. 591

(59) III. P. 592

周到に否定される、と、言わざるを得ないのである。

ところが、よみがえりを阻む完全な忘却、これこそ、又、皮肉にも、転生の可能性を保証するのである。

「思い出さない記憶とは何か。……我々は、我々が生きた最近30年の記憶を思い出さない。しかし、これらの記憶は、我々の全体を浸している。それでは、なぜ、30年に限るのか。なぜ、あの前世を、誕生以前にまで延長してみないのか。私の背後にある記憶の一部全体を私が知らない以上、それらが目に見えず、又、私には、それら呼び出す能力がない以上、私のこの未知の部分に、私の人間生活のはるか彼方にさかのぼる記憶がない、などと、誰が、私に、言えるだろう。もし、私が、私の内部に、又、私の周囲に、思い出さないあんなに多くの記憶を持ち得るとすれば、あの忘却は、他の人間の肉体の中で、さらには、他の惑星の上で、私が生きた生にも、かかわりうるのである。」

«Qu'est-ce qu'un souvenir qu'on ne se rappelle pas?

Nous ne nous rappelons pas nos souvenirs des trente dernières années; mais ils nous baignent tout entiers; pourquoi alors s'arrêter à trente années, pourquoi ne pas prolonger jusqu'au delà de la naissance cette vie antérieure? Du moment que je ne connais pas toute une partie des souvenirs qui sont derrière moi, du moment qu'ils me sont invisibles, que je n'ai pas la faculté de les appeler à moi, qui me dit que, dans cette masse inconnue de moi, il n'y en a pas qui remontent à bien au delà de ma vie humaine? Si je puis avoir en moi et autour de moi tant de souvenirs dont je ne me souviens pas, cet oublié . . . peut porter sur une vie que j'ai vécue dans le corps d'un autre homme, même sur une autre planète.»⁽⁶⁰⁾

このように考えれば、我々が、唯、思い出さないだけで、我々の靈魂は、かって、何物にでも宿りえた、そして、又、現在の我々の肉体を離れた後は、現在の我々を思い出すことなしに、他の何かの中に存続し続ける、と

言いうるのである。しかし、この考えは、誰もが、勝手に、「僕は、昔、聖徳太子だった。」「桃太郎のお供をしたサルとは、僕のことだ。記憶はないが、そう思える。」、「僕は、来世では、宇宙人になるだろう。」云々と、述べたてることを許すであろう。即ち、忘却を根拠に、輪廻転生を仮定してみると、この観念は、虚無と実在の問題という深刻な領域を離れて、荒唐無稽な領域に横すべりしていくだろう。結局、これは、知性にとって、*métempsychose* の否定にはかならない。

さらに、モーロワによって引用された、プルーストの未発表原稿を掲げておこう。

「ベルグソン氏が、意識は、肉体からはみ出して、その彼方にまでひろがっている、と、主張していることは本当だ。……彼によれば、魂は、脳髓の外にひろがって、脳髓よりもさらに生き続けることができるし、そうしなければならぬのである。ところで、この意識、それを、脳の震動のひとつひとつが、変化させてしまう。例えば、単なる失神が、意識をなくさせる。どうして、死後に、このような意識が、存続するなどと考えられるだろうか。」

«… Il est vrai que M. Bergson prétend que la conscience déborde le corps et s'étend au delà; … Selon lui, l'âme, s'étendant hors du cerveau, peut et doit lui survivre. Or cette conscience, chaque ébranlement cérébral l'altère; un simple évanouissement l'annihile. Comment croire qu'après la mort elle subsistera ?⁽⁶¹⁾»

Conclusion – Eternité dans l'instant

この論の出発点で見たように、プルーストが愛着した作家達、ボードレール、ネルヴァルの中に、すでに、*métempsychose* のテーマが見出されていた。前者では、曖昧な形で。後者では、感濁とも言うべき形で。ボード

(61) André Maurois, 前掲書。pp. 12 ~ 13

ルールが遠くから眺め、ネルヴェルが、その中のみこまれてしまった、（というのが我々の印象だが）、この観念に、プルーストは、真正面から取り組んだように思われる。記憶現象にせよ、芸術の永遠性にせよ、「失われた時を求めて」という作品の根幹に触れる部分で、持ち出されてくるのは、いつも、不滅の魂なのである。

すべてが変化し、果ては、虚無に沈んでゆくこの世では、すべてが、例外なく、永久に死んでゆくのであろうか。我々には、一つの永遠の可能性も残されてはいないのか。肉体の死、物質の風化は否定しようもない。しかし、魂は。永遠を求める人間が、一つの解決として、輪廻転生説に行きつくのは自然なことである。それを暗示するかのように、死に絶えた過去、かつての自己を完全に保存した過去が、今、よみがえる。死んでいたのではなかったのだ。あるいは、作者の死後、作品が作家の魂の永生を示し続けている。それに、我々の生の局面を仔細にみるなら、今の生、もう一つの生、という、*métempsychose* の大きなサイクルが、様々な部分に反映されている。睡眠と覚醒。変わりゆく自我。そこには、死と再生が含まれるのだが、自己は変わっていない。あるいは、親子代々伝わる形質から草草まで。そうしてみると、肉体の死後にも、死ぬことなく伝わってゆくものはあるかもしれない。

しかし、我々は、経験上、精神といえども（あるいは魂でも良いが）肉体に従わざるを得ないことを知っている。心臓が停止し、脳が働かなければ、何物も生き続けることはできない。転生を証明するものは何もない。仮に、輪廻がある、と、認めるとする。ところで、今の我々は、前世の記憶を一切持っていない。来世において、私の魂は、「今の私」の記憶を一切持たないだろう。これが、我々の求める永遠と言えらるだろうか。

プルーストに見られる、神秘的な面と唯物的な面、魂の不滅への傾きと否定、いたるところに見られる、この矛盾する姿勢は、ボードレールやネルヴェルよりはるかに深刻に、プルーストが、*métempsychose* の観念を考

(62) Gilles Deleuze は、*essence* という概念で、これを説明する。

cf. Gilles Deleuze, *Proust et les signes*, P.U.F. 1972, pp. 54 ~ 55

えぬいたことを示すもの、と、我々は考える。そして、不滅をねがう心情と、それを否定する知性の対立は、結局、どこまでも、解決され得ない。

この対立を解決してくれるのは、「失われた時を求めて」の話者が、長い遍歴の後に、始めて、芸術の意味を理解し、自己の天職を自覚する契機となる、ゲルマント邸での啓示である。この啓示は、要するに、無意識的想起の一例、したがって、最初の、お茶にひたしたマドレーヌのエピソードと、内容としては、変わるところがない。即ち、今、味わっている感覚が、過去に味わった感覚と同じであり、この、感覚の同一性が、過去の瞬間と現在の瞬間を結びつける、という経験である。しかし、マドレーヌの場合、話者は、この経験を、過去のよみがえりとしてしか受け取め得ない。一方、ゲルマント邸では、この経験が、時の秩序からの解放として受け取られる。「過去と現在に同時に共通していて、それらよりはるかに本質的な何物か。」*«quelque chose qui, commun à la fois au passé et au présent, est beaucoup plus essentiel qu'eux deux.»*⁽⁶³⁾ 「時の秩序から解放された一瞬間が、この瞬間を感じとるようにと、我々の中に、時の秩序から解放された人間を再創造したのだ。……彼にとっては、『死』という言葉が意味を持たないことが理解される。時間の外に位置する彼が、未来に対して、何を恐れ得ようか。」*«Une minute affranchie de l'ordre du temps a recréé en nous, pour la sentir, l'homme affranchi de l'ordre du temps. . . . On comprend que le mot de «mort» n'ait pas de sens pour lui; situé hors du temps, que pourrait-il craindre de l'avenir ?»*⁽⁶⁴⁾

前の生、今の生、次の生へと、時の変移の中で死すことなく生き続ける、永遠であり続ける何か、を求める行為は、確証が得られないまま、挫折する。ところが、永遠というものは、*métempsychose* の可能性にのみ依存す

(63) III. P. 872

(64) III. P. 873

るのではなかった。プルーストが、最終的につかまえた永遠とは、時間の海の中を限りなく漂っていく種類のものでなく、過去、現在、未来の時間の枠が突然消滅した、特権的瞬間の中に見出されるものなのである。そして、瞬間の中で得られたこの永遠の永遠性を、時の破壊力に抗して、守ることこそ、芸術の目的となるであろう。